八犬綺語

壱

壱13
976
1

文化　甲戌

曲亭主人編輯

蘭齋北嵩繪畫

八丈綺談

選13
中
號976
巻1

八丈綺談序

夫勤書之苦著述之勞古人最憚之矣謝在杭曰思慮之傷命甚於酒色有壯年手余遊戲筆墨者二十四年於此彈精竭慮勞心又甚矣自是用心於藥餌或丹或湯嘗浦劑者亦復有年矣雖然未能取効其倚樹碎甚據梧之効也一日閱許氏本事方曰用損讀書一減

思慮二專内視三簡外觀四旦起晩五
夜早眠六甲子六物熬以神火下以氣籤
蘊於胷中七日然後納諸方寸修之一
時近能數其目睫遠視尺箠之餘長眼
不已洞見牆壁之外非但明同亦延年
晉張湛嘗授范寗者是已余視其方之
可治爲卒然欲試之乃不果固有原憲
之窶無子貢之殖自非勞意思於著述

豈得畜數口縱以奇方故雖能耐老延
年又由此苦於飢寒則亦何益既已有
良方無由採藥已矣讀曰雖有珠玉不
如金錢雖有神藥不如少年徐福鳴子
入海而求僊還江而訪故無益於和濮
如二子徒知其方之不死又惡知採藥
之無塗至今爲俚俗所笑我唯欲與共
異趣得焉哉故欲攻末者先治其本欲

固蔕者必深其根設支始不固又不揣
終猶且耐久者我希矣嘗試譬之白龍
之為神魚股而不能避余且之網豈有
他哉微彩悞佯細鱗狂態嫚於人間蓋
遊戲之失也我唯欲笑之又不可得今
茲及著此書即述此事以解頤
文化十年癸酉春三月十又四日書於
蓑笠漁隱

八丈綺談姓氏畧目

齋藤道三　齋藤義龍
尾花才作　尾花才三郎
蘆月一角　白木諸平
牧村衛門長晴　蘆月角六
獵夫復市　獵夫株藏
手口鍱次
僧的心　小斯岐藏
牧村牛次長通　小桔梗四
嗅聲
治駒　阿駒
姓氏畧目終

作善百祥
不善百殃

海婦谷折

美濃の尾山
白木の諸平
樵夫

西方論
縁業
早と
喩愚俗

悪僧午句坊

不破の浪人尾花才作

谷山

白木屋
阿駒
尾花才三郎
在原の
行平の
神靈
尾花が新婦
牧村の活駒

みれまーや
さーれまろ
ぞの
狂女
澳水
白木屋れ小厮
復塚の岐藏
蘆月
一角

僧曰
霧海沾洲
苔云
僧
鉤鐘建立
願主
願主
月条
主管丈八

八丈綺談總目録

發端　尾花乃秋
又　蘆の一叢
第一　不破の関　燈歌
第二　落黄葉　燈歌
第三　豆煙霞　燈歌
第四　あ足乃駒　燈歌
第五　驛舍の鈴　燈歌

總目録終

美濃舊衣八丈綺談　巻之一

東都　曲亭馬琴編演

發端

尾花の秋

天文年間のころ。稲葉山に居城ありし。美濃の國主と時めけり。齋藤山城守道三は西京の人にして。貪りしと。油を賣て活業とす。又今様乃田子を好く。声妙に唄ひつ。遂に美濃路に往歴して。國を時頼藝が長臣なる。長井東左衛門に愛せられつ。ひととなりその家の老臣となりつ。道三元来大なる。志あるものなれば。頼藝主從墮弱にして。州民をのこ皆悉くとうとく。私恩を施して。堂を樹主の長井が死るに及て。能くその采地を横領して。勢ひに乗じつ。竟に数郡を攻て。刺國守頼藝を滅して。濃州を一圓に管領せんとやとぞ。時氏は累世當國の守護なり。國乱れ民苦く

ものなり。なれバ旧恩をおもふの者あり。流石に事を卒介にせざれバ民乃望を失ひて。竟に大事を就がたし。竊に腹心のものをもて。頼藝をうしなはんと。後ちすくるものハあらじとこころひとつにおもひ決けれども人の諫んことをおそれて。伊賀。牧村稲畑木の諸家老にも絶て意中の機密を告ず。詎欲得とおもふ程に。年来不便のものとして召使ふ小扈従に。尾花才化。芦月一角といふものありけり。尾花ハその性。李向を好て謀あり。芦月ハ人となり。武藝を嗜て心悍し。いづれも年ハわかけれども主のためにハ命を惜ず。賊ごろなれのうゐに彼にもそれ詎ゐ命せん。覗才化が智でもて謀り。一角が勇もて撃ばいと易かるべき事なりと。とくとくこころに撰定めつ。有一日道三ハ件のものどもを招よせて。竊にいひふくめて汝等もかくとしりて。富田の館へ潜入り。頼藝を刺ところして。かれが為に患を除ば抜群

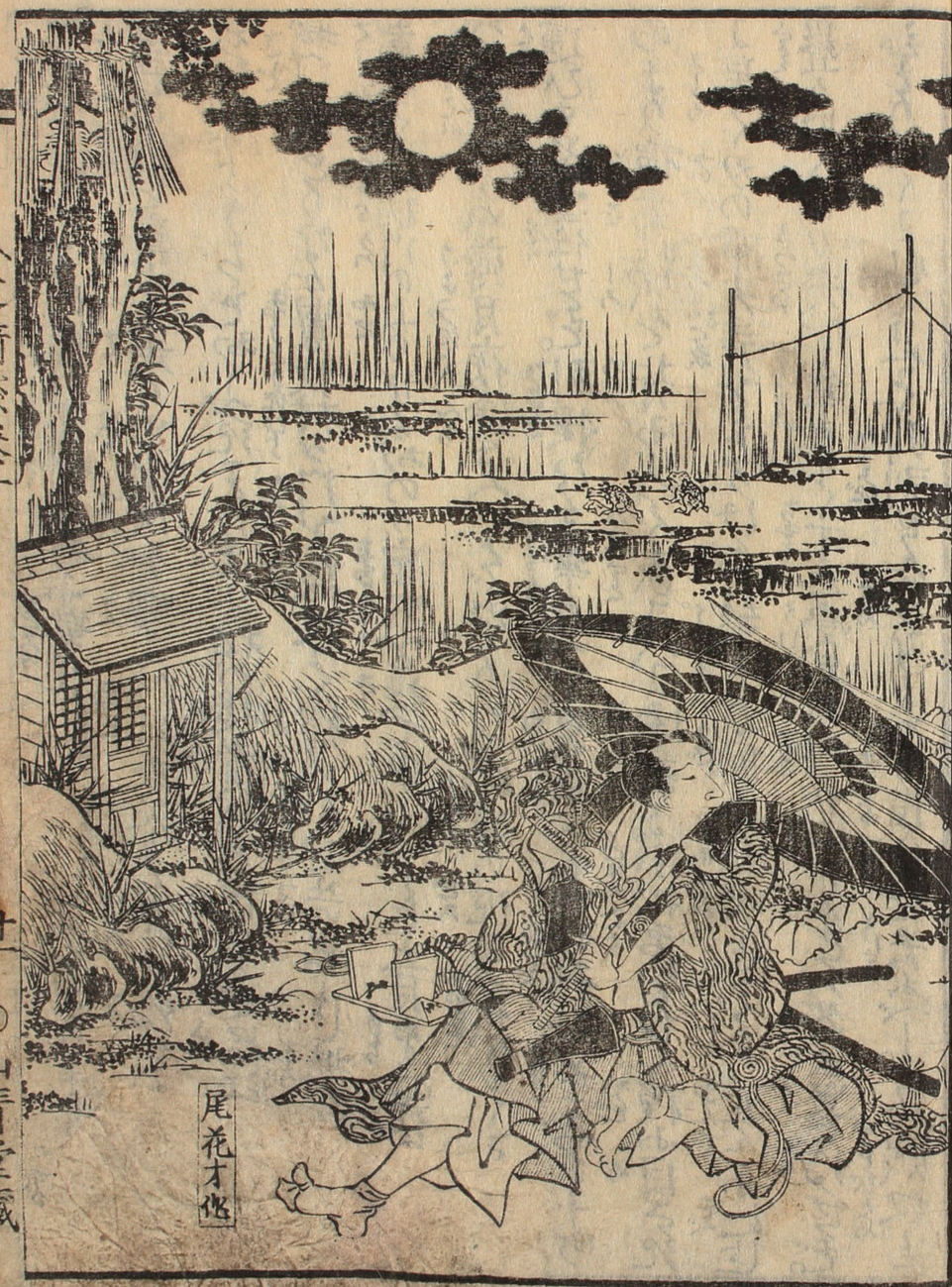
の忠なるべし。恩賞ハ乞に任せん。努。人にもるゝことなかれ。と正首に密語へバ一角をはじめとしてみな。満面に笑を含て仰うけたまはりぬ。彼人の首級を齎し見参にいれんとて。三日の外を出べからず。されどこころ体へあやまりてと縛もうけに応しべ。尾花ハ呆れてあやしめども主の面をうちまもりて御掟でありしかどもとらのるあるべきかん。企ともおぼえ候はず。頼藝ハ懦弱にして。美濃の守護職を停廃せられ。冨田の正徳寺にこもりますとも。桀紂が悪虐をおこしたるにもあらず。運に時あり。人に盛衰あり。君天運にかなはせ給はバ微賤の身より起て濃州数郡を領しあひ給ふ。彼は名家の後にして。先祖相傳の采地を奪ひあひぬとも戦国の流俗にして。例あることなれども。これを殺さバ不仁なり。人知らずとも天に捷。天定て人に捷。抑不仁不義は子孫繁昌せるものにあらず。天おそろしき企ハ。応ずべき所もあらぞかし。

止りあらんとのこと。かしこゝと一角を庶目よりけく。そひの外に練ーぶ。道三こと云ゆとわくど。呵ことうち笑ひ。如此ものと。今こゝひーに戦れなり。假内に言を設こ。汝ホを試こるふ。一角が勇氣わまりありく。思慮足らど。才能に思慮餘りありく。勇氣足らど。彼が撃んとひーを忠ん是ぶ犯ーく練ると忠ろり。ものづふ理非を辨まれば。才能ぐまうに所主に益あり。汝ホころを一致ホーく。ころーとろふとあーば。憚らぶ武練よ。そふのすは才能捜まり。引出物まべとこく。左文字の刀とこーせらべ。尾花に感涙を拭ひわくど。弱年なる微臣が異見と時にとりくに沿こ。稱ぐるふ公私の大幸ことにもど。君既に絶こるを継廃まこるを興ーるふ。仁義のはころ仕さば。練鼓わりとつふとを苦菽ーく。當國なぐわんるふ入らべ。教びこことにまとのなーと祝ーつ。禄ありこそ。ちんまと退出ーえば。芦月一角に。

面目を失ひつ。ものくぐと嘆息ー。時頼藝に當家のためふ。実に腹心の病に渠當國よりわーんに入べ。遂に子孫の患ひをなとべー。戯謔とものひころ出ることろ。戦まこりとに宜くどと。竊に頼藝とこーるまんと。謀その図に當ころ。騏驥の衰てに駑馬に及ばどこらぶ君つ。なるまべ。迂遠に才能が。仁義の講釋に説惑さとてく。盗ホ糧を齎ー。讐に刃を藉めるこてろねどこ。と呟ば。道三莞爾とうち咲こく。一角さのこ恨ることそ。今これ汝と才能に心中の機密を告るふ。渠奴憍に後ーど。博士ぶりこるこを練言を聴べこと。ものに私ど謀に洩ーこりこ。就まこに紛ら。練言を納ー。引出物をとこ。渠が心を安くせ。支を洩さどとべこり。汝が武勇に才能に拙きり。方ものとなりとと當田ホ郎紀。頼藝を軽べこやと。とべ一角小膝とこめ。そに御淀少やおこべ。唐山の秦舞陽。その年僅ホ十三ものとと燕の太子に相譚まこて。秦に如皇と

刺んとせり。某今茲廿一歳。秦舞陽よりたぐひ。年さへ既に八十ぢ。ぬかるべ
蒙くば。君が武徳を頌に載さ。竊小富田、効れく。頼藝を刺んと。常と返と
ぬ。いと易くべきことなれど。心憎さ才化。渠が當家に長臣る。牧村衛門が婿
うまとべ。只今君の仰せ。いとぐ男に生ざるべき。生るべ君を疑ん欲さる。
とれば妨あり。妨ありくい事成らじ。とこの密支をきれるめ。某と才化のと。
竊に尾花を殺しめ。人にあらくとなく。又疑るくとなし。賢慮を
めぐしあへ。と言葉を巧ふまうせ。道三ぬくうち点改汝が遠謀
うぢ意に構へ。あくべ今宵才化を城外へ推引出。人をまとを拵とそみ
統討に箇様とと。主後耳をとりぬ。閑談とれをうしけり。抑芦月一角が
今絆れ便宜とゆく。尾花才化を園撃ぬ。渠が男牧村さへ。追ひ失んと巧
ぬる。一朝の怨にあらじ。彼牧村衛門に。両個の子どもありけり。家子を牛之次

と名づけ。末女を小桔梗とゆびつ。小桔梗二八の春を迎へ。遠山の眉翠をは
桃李れ膚匂ひ。なり。さへぬぐ。色ぶ愛權につ。みる色人の情ふ。一
角に。いちと。小桔梗を娶んとく。媒妁をとらへつ。そのるとをいとせ。衛
門に渠が人とちり。ところねぐ。とのるとをいとせ。この縁をうけ。
みづと擇へく小桔梗を。尾花才化に妻せ。去年春とるに。一角にこの
るをとと打とへく。とべと。牧村に權家才化にその婿うり。今故なしく
彼ぬと爭ひ。捉をとるべきやうのなけれど。恨を活して氣色ぶんせどるを
ぐるとをふにぐ。ぬとと伏をを。ところに中に。ふく飲びまぐ
とや尾花を殺んとく。准後をきとけり。さるれに才化。この夜直寝
なりしに。遠侍に臥るぶ子二の沈宿刃に。使来とり。妻の小桔梗が暴の
疾にぐとひく。と危。とく退りく看病ぐ。息の内ふにあひぐかん。


尾花才作

まえ村備つ
あ月一角
さいさく才作を
ろうとう撃ん
とうく一角
命を
陽を

と忙しく告るものあり。才佐これに驚かされて。縁由をとはんとしけるに跪きて
主君の許を稟て。走り出つ使を喚よ。何処かゆきけん心を得せざれば。
おひながらうちくとおくべきよすから。従者等を倶せざれども。東の
城門のかたよりなる勇牧村が門を敲きて。縛の趣を告おとし。城の後門より
走出て長柄川の上りかゝる。おのが宿所を投てあゆく。忙しき五月雨の夜のとなれ
ば天霽やらぬ薄月夜途さへいとくぬかりつゝ。蹴揚の泥に裳をなしくて。歩乃
運びもおほつかなき仕せざ。引提たる傘のとく。夏草の露を掻拂ひ辛おちて十町
あまり稲葉の城を背ろなる。人家さへに遠離る。小松原をゆく程に目さえ
に見えぬ刃の電光声をとろけざ。撃太刀風を吐嗟とぞなり。左手に逗
畳かける刀尖を。傘のとく丁と受とめ。何ものなまぐる名告を得せざれ。
退けとりやくこれと見るて。引剥せんあなからば可惜命を失ふべし。この賊奴と

罵りつ。面を傍と透しかぞゆるに。おのれなどゆるてびらうち怒るさこそ。其月
一角狄と同じ刃を閃りとしていて。頬もとりせしに手拭をかぶり捨て冷笑ひ
おさくる尾花才佐。とてとかくてと治くいかくさぎ。冥土の褻に一五一十を
説まうしく成仏させん根を断て。薬枯を主君今度れおん企いその図
に當ると悟りつゝ博士ぶりくる汝が諫言貳ごろあるものなりとて。
いて憎せあへども明に地に罪なけく。是より縛のかゝるとなりるんされば
とく助けおくが遂に密事を泄さるべし。且く心を安くさせ。計べき術あり
とて。諫を納るおもむきにして。左文字の刀を賜へし。汝が命をまつんためりて
これ密に仰をうけあり。汝が妻の小枯枝が急病と詐り。奥にて囮拔
とて殺さるは是主命。年来憶をやらせし小枯枝を娶られる怨を復さるゝ
これが宿所を二ッなからう果さんあるに。汝を侯と久しうし刃を受よと。敦圍は才佐にて

歎息し。良薬ハ口ニ苦く。諫言ハ耳に逆ふ。比干ハ諫て胸を裂れ。伍子胥ハ鴟夷
の皮に盛らる。忠臣の鬼となりて。屍をこの野に曝んと。固より庶幾ところぞ。
さるべくとも。奸佞ふかく主を惑し。汝がために阿容ことさひて命を隕さんや。
冥土の伴侶覚期せよと。いひもあへず一角へ引提し刀を額に翳し益なくり
云拒やいなや。死出の山路へ先立と。罵る声ともろ共に。揮閃も刃の下を。左
右へくゞり潜る尾花も刀を抜あはし。一上一下。劣らず勝ず。鎬を削る大刀音の。
丁と撃てハ引はづし又丁々と挑みあふ。刀尖より火を出し。奮撃突戦時をうつしぬ。
一角ハ日来より屑ともおもはざりし才化が武藝侮がたくて。拳ハ秦凡大刀をもち
狂ひ受ながしたる刀尖あまりて。眉間を礪と砍著られ。株に跌き。度を失ひ尻居に
撞と摚援ハ。才化得たりと跳蒐り。又隅を丁と砍る刃に携りて身を起しつゝ
跌く雨後の泥に流るゝ鮮血を踏荊く。矢声を激し戦へども深痍なれバ勢竭て。
遂に尾花に撃れたり。かくて尾花才化ハ。忽ちまに砍伏る。一角が吭を。鍔元
まで刺徹し。躱く死骸にのがしかけつ。血刀を把ながら肚を砍らんとする程に
也ト侯尾花と喚ハりけり。稲塚の方より。遽しく走り来るを。誰とよく見れバ
別人ならず。才化が舅なる。牧村衛門長春也。おひうけながら。とかせむべくもあらずとゝく
いふとどまり不且く刃をとどむれバ。牧村頻りに嗟嘆して。稍その由をうち
きゝつ。今とてハ事生る紙許しくおもひたらん。最早に和殿が門を敲こそ。小桔梗が
頓の病著いと危しとて。宿所より使来りぬと。告しらハ。胸うち騒ぎて枕すれど。
わたくしんだやとおもひつ。又閑るに私卒奴隷を。呼ばふ時や楊に子をおもふ
閨中の従者をと倶せども。ここに来りつるぞと主君非道のおん企一角が奸
曲さへ。巣口づたひすをしらずを。ちかより窺ひのぞく。蹤るさかしまに呀え人を殺せバ脱る
べうもあらずともそゞろに。自殺せんかなれ早かりし。まづその刃をおさへあへ。

と云で才化が形を改め。主君此度の如企ある危難の縁故さへ。あらかじめしらば

せんとハ告るに及ねど。一角ハ毒悪なり。倭人ならねども某を殺さんとせしを

主命なりとも。初より知りつゝも渠を撃して主君を惑さる蠱毒をさらに禳ひ除て

忠臣泉下に在さんものを。あらぬことにて使を殺しける罪脱るべしと

まづかりといひも果ず。太刀尖を左手よりめぐらし肚へ突立んとしてけり

あるべ。衛門ハ急に推禁めさせのみ早りそ。いかにしあり。主に仕へて私なくどさ

など有用の壮佼なりとも。女児が係る和殿の必死恩義に拝され愛に溺く。

ことしまで女と云く禁んや。死ハ易して生ハ難し。とても死べき命なり

とぞ。箇様にて計ましく。主君を諫めなば。らば事成らずとしく。お佩刀を擬

さることありとて死ぞのそ冬ハと忠臣の誠に主君の惑ひを解。大約此度の

お企をおひどまりあひぬべく。ゆく命を損さんより。過に倍る幸なりけんや。

短慮ハ功を成ず。亡年ころけしからぬ思慮あるに似ず。事宜しからず。こゝ禁帯あれ

ごのゆゑに。かくても自殺あらんやと理り迫てる言の葉に。今散かゝる花瞽

も。おもひかへしつゝ。忽地て得ハ老功説得て好あらバ。且く自殺をとゞめつ。

ゆるしび主君を諫申さんさへとて。血刀ひきぬき抜へバ月に剣も雲霽て

か胸におさめつゝ。鞘とさやに納せども刃ハなほしらぬ死樹下闇に

鳴杜鵑死しく冥土へいるの声に山寺常を示すと遠寺の鐘に暁ぐる近くの空

あけり。不題斎藤道三ハその夜さり。人あれども尾花才化を殺せとて。芦

月一角を遣せしより。いかにしと候ども臥房に入りなば。通宵いも

ねらまほしけれど。はや暁うかんとするほどに。臥房ちかく来るものあり一角欽と

向ばありと答ふるこそ。いそくと呼入せて。屏風を推開つゝ出て見るに

一角ハあらで。今はや死せりとよびける。尾花才化なりしかバ呆れ

不善力
作仏
盛綱成

果て大息を吻き。汝行とく糸じと向へ。オ仙さんざぶらふ。きの小微臣が涙
言式。若せあべるひとくをいとろど。推量りゆべ。ひとくしゆふよわとぞ。ろて
某昨夕富田(潛中)に。頼藝ゆの首級を。もらりてゆば。実検よ入をとて。
推手くいりとく商せと首桶とおとりちくさしよをとく。をとら蓋を
ふとりをとんとをび縛みる齟齬と。一角が頭うとを。道三勃然とうと膝
立ちわ。ゆをとを才仙。汝ハ誰が許を稟て。一角を殺しるこのもれ行ホの罪
うあるゆふとうわふべゆんと。敦圍うぐら。枕よ立てる刀を取て反うちかをべ。
才仙驚く氣色とうて。一角ハ君と我を。奸佞の癖者うるよ。ゆれ罪うと
宜ふハ千慮の一失是非よ及ど。君よ媚て悪を勧め。絶て安危を念とせざる。
かる鳴中の癖者と罪ひとあるく。頼藝ゆハいよく罪ひいてをりれ恨
ありて。亡んとハあるゆふゆん。微臣が迷ひとれ一。又時敵ハ當初君が馬を繋ぎ

ゆひ。長井氏の主君ゆりて。當國の舊主なり。勢竭て一郷よ。その者を置
うれゆへ。とて。こを式ゆんハ非道ゆり。氏の心れゆる而ハ只義の一字ふある
の式邪式非道の行ひゆふべ行の氏うるぶ君を。君とて。仕ふべ。微臣が
迷ひとれ二。君が禅の道三ハ原是曾子の語よ出て。道よ貴ぶ所者三。と
あるゆハ違ふ暴慢不信。とろ鄙倍在さべ。貴道の三ハみる闕うと。微臣が
迷ひを三ゆり。愚なるんゆと。既よ三の疑迷あり。君り非義のゆん企と。
ちひとでまりのりどハ。一國の氏みる疑ひて。忽地離ま背くべ。地を廓さ
ふ國を富をハ。德を積よまとを。氏德風よ靡くとをハ。逐ひゆふぞとを。
藝ゆハ遠く去りてゆる日なりん。この理りをやきんゆる。主命を受て。
一角とゆりつと。渠を誅ふハ私うとぞ。きのふ微臣よゆりし。左文字れ刀の
德よりをべ。奸曲邪智の癖者を。ろぞ君れ出をづて。撃せゆふ小異うとぞ。

あらバ今この首実撿ハ粍藝めしのおん首級ぞ。さればまして愛うら
ぞや。君に過失あらしめても。老臣ハ禄を重じて諫めらず。外様乃ものハ
まうすとも通ぜず。諫言の道塞るときハ。貴人みづから法を犯し。そのの
非を改るに由なし。よりて某恩賜の刀をもて一角を殺し。臣として君を
陵犯し下として上を犯も身の罪をしらざるにあらず。これ事ハ延じ見がたき
ことをまうすも皆君のおんためなれバ。粉骨砕身も思はず。身ハ醢になさるるも固
より惜命にあらず。まうせしに一言半句も用ひ給ハバ。一期の大慶是に私乃
幸ひなりと席を拍涙を流し。抜放さんとする刃の下へ推居りつ。項を伸し。
死を究めたる壮士が。誠忠氣色に顕れたり。されば怒りし道三も。絆みなる道理に
逼られて。拿る刀の手もしをと緩る。ものうちと歎息して。捧礙ととり納め。
嗚乎過り失ぬ諸侯に爭臣五人あれバ。その國を失はずと。聖経にあるよしを今こそ

思ひあたりしとて。みづから非をしるときハ。いそぎ彼を賞せざらん。覗芦戸一
角ハ奸佞の癖者なれバ。彼れが刃をもて。渠を殺しつるハ。このみ秘て人にもしら
さで退りて。休ひねへとぞ。いともしく感じたまひしうつがつ。再び生るなり。家
翁しさふ才作ハ。涙坐に禁あへず。寛仁大度に在せばこそ。諫めまうせし。かひハ
あれ今の御掟ハ一郡を。あつかりまでいふと回答まうして。首桶を。袖に纏ひて。押
隠し。ひそかに宿所へ退出つつ。密かに一角が頭を埋めて。人にしらせず。これより
道三ハよろづ行状を改て。生るを愛し殺を嗜ず。己を正して佞人を遠ざけ。
善政をさくし。彼此にかえしかバ。美濃の州民みな悦びて。隷ならざるもの
なし。てふ至る時頼藝ハ。憑む樹下に雨もりて。富田山を去りぬ。拒逐されし
ども。逐電ありて。往方をしらず。かりしかバ。道三が志ハ。忽地に成就して。刃ハ鼻をもて
國をとり。それが併尾花才作が。精忠によりてなり。そもとそれにも。加恩の地

五百貫を与へけるに、才化は辞して受ず。つくと思ひ出するに彼風流める今の世の人の心に常ありけれバ君の寵も憑がたく、身の功を誇るによしなし。彼芦月一角は奸佞の癖者なれども渠のしられに移れまいらする君いとも感激して輙く諫を容まへらん、さりながら積は彼にあり。あへるに芦月はその家既に断絶して、それのみひとり加恩を受て心に愉しとおもへども加旃一角を移と見ゆ。苑の弾月を傷られたるが、その痍は、すや愈しかれども、折々疼を堪がたし。物に崇あるがごとし。吾愁に用ひられなく、人の妬娼を受んより、仕を致して世をすごさんやと思ひしかバ、まづ男牧村に相譚つて、病に托け只顧に身の暇を乞しが、牧村衛門はいもさらに道三ひらく惜て、懇にとどめよしけれども、再三再四乞ますれば、主もさすがに術なくて、身の暇をとらせけり。時に天文元年秋九月、尾花才化は妻の小桔梗と、去年の冬挙ける一子才三郎のを携へつ、稲葉山を退去て、同国不破郡なる関の小川のほとりに移住し、二町三反の田園を購求て、親子三人が衣食に乏しからず富にあらず。独書学問をのみぞ好みけるに、妻の小桔梗も、その性怜悧なるものであり、昔紙恋しとをおもへるぞ、みづから火を打水を汲によろづ質素に旨とし、つ坊もせぬ宿となりくは、つが子ひとりに慰めて、尾花の秋と今下しれ、ながめに倦ぬ心持せり。

おくえ下

芦の一むら

芦月一角が父を角六といひけり。年四十に及ぶまで子どもなかりしかバ、ひそかに美濃の尾山なる因果塚に祈りて一角を挙たり。美濃の尾山を不破郡にあり。ここに古墳あり因果塚といふ。人みなその廃跡ところを因果と唱て祈るときは、かならず霊験ありけれども信心なる間なるときは却崇ありといふ。かかる由緒に、およそて祈るものとなれば、芦月角六は子なきを

ふく歎くのあまり、者のびくに参詣して、竟にその利益を得たりと云ふ。よりて、主の道三が稲葉の城を築し頃に、因果塚の利生を唱て、あらたに一彼山に一寺を再興あらへしとは、願勅めすませしかば、道三その議いづれあしとぞ諸家老に問はしては、或はあるべしと思ひ、或はあるべからずとまうして、衆議一決せざりき。時に牧村蔵門後にて参りぬ。道三又彼塚の事を告げて、その是否を問はしてかば、蔵門答て、その識甚然るべからず。彼因果塚の縁故は、里老の口碑に伝ふ、むかしのひしにむかし在原業平朝臣美濃守たりし比、野上の里なる柏手といふ遊女を召れつ、浅からず契りあひしが、任期果て帰洛の日、再会の像見えて、年来手なれ給ひける硯の背に、立田山稲葉の山の峯におふる松とし聞かば今かへり来んと、留別の歌を雕著して柏手にとらして、都へ上りたまひき。世にこの歌を業平須磨へ左迁のとき詠じたまふといふめれど、稲葉山は当国の名所なれば、業平朝臣此処にてよみ給ひしよし、国史に見えずとぞ。柏手は業平を恋慕ひて、件の硯を身に放さず、乾く袂の露霜に、去年と暮し今年と明せば、いと歎に堪かねて、世をうらみ身を嘆きて、硯を友と墨染の衣にやつして容変え、美濃の尾山に菴を結びて、生涯業平を祭せしが、その跡竟に寺となりて、柏芒寺と号しける。住持の僧、数代の後、午句坊といふ悪僧住職せしとき。その比、不破の郡司が後家に、谷折といふめの良人が身まかりし一日より、午句坊に魅されて密通夥の年を経て、良人郡司が世を去りては、いとゞますます憚らず、夜な〳〵柏芒寺へかよひつ、彼悪僧と快楽せしかば、里人大かたこれをしりて、あざ笑はざるはなし。又彼郡司に一子あり。其名木二郎とよばれて十五才になりぬ。松の梢ゆゑもなからで、名を五人塗る

このぐん恋慕あまりて好淫に柏芒寺の張本

えんぎ因果塚のえんぎ縁起
りんん淫好
その子を殺ころす
木二郎
牛句坊
谷折

そてきまのられ名やのくさふ朽をしさまに。ことさら父が子にあらむぞ。彼盗
夫の猶ひたるその面影もおのづから。午句坊に肖たりとて。里人ふが口さが
なき蔭言さへにありけれバ。浅ましれるいふべうともあらぬなれバ。
小寄生の身なれバ。果をいふせん。ことや形貌ハ人にかくて。獣の生を稟たり
ん親のしらぬ親とらせ人のしらぬ人とそをえより。親と親どもにふ許られてほ
身を殺さバ年来の悪行を改て。誠の道へ入りあの郷導ととなりなバ。さら
ぞくらきとり死を吹めあるとも母が倒のぞく。柏芝寺に止宿せし夜木二郎ハ
面を包て形を変更閑て。彼山寺へ潜び入るに案内ハよく知たり。法師と
母が枕方なる賎布の金銭引出し。驚ろかさ号んとなさむとするに。二人が枕
を躙て跳て。足音高く走り出しバ。吐嗟と驚て悪僧淫婦ハのそろとも小
身を起し偷児等と喚りけつ。中にも谷折ハいちそくに竹縁のおそりて。

木二郎を引とらへ捩倒さんとせる程に。顔を見んせじと背向になりて母を推
退復退るその隙に午句坊ハ戒刀を引抜つ。きり蒐て木二郎が右の腕を
うち落せバ苦と叫びて仆るを外ならぬ谷折ハ上へのがしかりて。押て頭を
かゝせバ。さらに灯をとりて砍殺せし。偷児をみれバはからずも牝牡特
中に挙ゐる。然も合の木二郎ハ懐中に遺書あり。親の悪のに身を怨こがう
詭計て死るといふ筆に誠を見ハせしハ。孝とやいはん賢とやいはん。淫楽に溺を
あらざ良人を良人とせざりける。谷折かのことゞも今更に。ころが子ハ横死に心
も消うせの限りをくし口說腸を断哀傷の涙と共に声を惜まず。流石に子にや
羞ありけん彼戒刀をみてとりて。咽を衝きて死してけるにぞ。山寺
牛句坊が住持しきより。衛てに荒まさり。徒弟同宿ふとまでおもひ
このとき僅に。銭八貫一百文の外に物をなけれバ木二郎がとりて走る。

財布の中なる金ゆゑ。乃當寺の什物なる稲荷山の硯なり。破戒を恐
の悪僧も。親ゆゑ迫る勝なりけり。かゝる子をもづゝ殺し。最愛の梵妻さへ
服前に自殺せしゑば。且哀に。且慚に。共に死んとおもふのに。愛惜のゆるこなきに。
まづ谷折と木二郎が死骸に石紙著く。庭の池水へかゝり沈め。又彼稲荷山
の硯を投入れ。銭八貫百文を。その上へ投げ。こゝより疾くく寃魂顕れ。奇異なるものに尋かりしゑば。
法師もなく。忽地に廢寺になりて。礎の蹟のこ殘せり。あるいとぞと寃魂とふ
く。頼り沼ゑば里人ホ件の池を埋こ。塚を築紀因果塚ととなへつ。いのをこゝ
なるものゝぞ是験あり。あるいとぞと信心後に多用なるゆゑ。崇ありといひ
伝ふ。彼塚の縁起くの如し。かゝるゆゑ不祥の塚へ。ようや世の災ありとも
不来悪鬼の面なるゆゑ。信ぞるゆゑ足らぬ。崇るゆゑ足らぬ。軍用多し紀

ちゝと紀。数百年絶る寺を再興あらんい物体なるゝと故事を述道理を
ふゝ。叮嚀ふとでめしゝゆゑ。道三伝のくうち点既あらゝゆゑ是用の塚を惜べ紀。
稲荷山の硯のこ。件の塚を毀しく。硯を取らゝでやといふよ。御門ハ又ことを
練めく。鬼神ハ敬しく遠ざくと社義と。一筒の硯を惜せゆひて崇ありと
いひ伝へ。塚を毀しゝ人ゝゆゑいよく物体なるゝ。ちかゝりゆゑ物体なるゝ。ちかゝりゆゑ
をふゝ。道三ことを紀ちゝとく。遂にその沙汰に及ぶ芦月角六ハ申う
なる紀ゝ紀勧めゝとく。忽地主に見おとゝをとく。いく御門を恨ふけるゝ。
争ひ沙汰ゝとなく。因果塚へ詣んゝゆゑ。今更嗚呼なる而ゆゑ似く。主
君へ憚ゝ紀ゝあらゝねゝ。崇るゆゑ。ゆゑ。あのゝ。等閑ゝゆゑふゝ。さる故ゆゑ五年
前に。角六夫婦ハ時疫ゝゆゑ。あるゝ比に方まりぬ又彼塚の祈子ゝ。一角を
心ざゝ奸曲ゝく。才伝に拏ゝゝゝ。その家終に絶せり。用治休題一角が

この限ハ尾張ノ月ゝ詳猶并ニ白本諸平が才伝ニ不和の張本

この限後に才伝ハ稲荷山の硯ゝ紀ゝとかもゝ張本

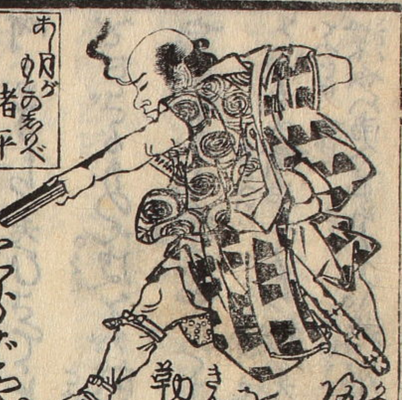
狂死のくゆ。雅亜なることなるめなく。嗣子を子とする死めなるべきの下駄を役収せらるゝ。家財を估却せらるゝ。五十金を代りに。牧村衛門うけめらりて。件の金代物さろよりとりて。廿五金は芦月が菩提所へ布施しく。祠堂料を先を賜り。又廿五金は鍔次諸平とゆるしく。年来一角を使てる。両個の奴隷小取らるゝひぬこの奴隷ども。力を家たりと失うるとど。忽地を主ふ後して。進退難義ふちぐるより。ゆえしるべ。牧村衛門こと氏憐をかくのごくそろしく。さて次の諸平が母は一角が乳母なりけるべ。主家を舊家あるものなるが二親はなやなくうりて。その舊里は當國なる。不破の白木と云へるより。又鍔次は下総なる。行我の名にはめふるく。故郷ふ妻あり子あり。近属身上不如意なりて。債を贖ふ役若なるとべ。所縁を募ふく美濃路を勘ふ一角小使とく。僅小二年をなるに。かりとべ件の諸平は今守りある金のことと洗次と。

ふ数なるとく。欺ばどとことなるし死下郎なるとと一角刀袴は乳兄弟なるとべ主家を由縁ばるべ。あるふ一季半年の鍔次と高下もなく。こまとの金代のるとべ公なるべと思べども。守乃賜をとくやさんも恐けるべ足らぬなるべとも二りをるとる。十二金餘を腰を著く。畳彼齊一芦月が宿所を立退死稲葉山より一里を足らぬ河を村のかとりまぐ来をり。道次を一軒の酒店ありとべ洗次諸平ふて小両三碗の茶蘼漉を酌く。別離の情を述ことをり袂をとくなれ二三町しるとも小丘く袖ふ。とこをとべ二人猟夫とおべ死が小松林の芝生あく。打つ巻をつ挑るあり。鍔次人となり。惻隱の心あるめなるべ。この光景をつそぐをふ沼堪ぞ。走り蒐く一人を抱留ふ諸平を已こ氏沼ぞ。その一個を引とべ。縁故をとべぬるべ。一個の猟夫声をり立旅容とをり乃ある

うつ孫どもなんとなすべきやの。つゐに復市と呼ぶ彼は株義と呼ぶ。彼
も彼と如々嶋山の麓より。けふはさるを獲のうて。腹とさるうちつゐ立
里より生ずく小半時の片白小醂を伐しつゐまづ五の叢に来る一隻の兎ども
を駈出せり。這奴は後にて来るとぞ。折ふしぞ紙舞とめくりぞ。
とう兎を駈出せりふつゐとうとべくいはせとあくぞ株義は眼を睜り足踏
をうち鳴もいと奴うる。汝も鳥銃はのちつゐんの弦をしくうぞて舞ざるつゐ
撃ぶうくしつゐ取る兎を。汝は猶ぐ捉ぐとさせんや。と送よいぬまた罵る声の
いくく醂うとんくくうとまくくぞ。吻く息は鼻を穿て醂の柿し匂ひ
ちうう。諜多渚平ふこと紙寛くさるぐよてらゐと醂うるめ癖ふ小べ
おるドとのうう返くく。猶果べうとあくざるべ。諜多要時尋思くく一
隻の兎は両個の主あり。孰をぞとうるぞ。所詮この兎をうるとうは賣て

償とゆうるうるうる取べ。送は恨はなるべ。とのべ復市株義ぞつぐと呼べて
うち点ひとの截判は況はく理あり。かくまぞよいるとぞ。かくりと和睦をて兎
の價を百文は定め。則銭をうるうるとうく。諜多ホは就びゆゑ株義は又尚獵
んとうく。岷のうく走り去。復市は家函なる。加々爲を呼ぶく立ひるはとと。
殊更は醂うりけん只跟と蹌ことうく。一歩は高く。一歩は低く。背和の木ぐるく
まぐ。両三遍跌こうり。當下諜多は。件の兎を引提つ。迴は復市を目送て。
呵とうるうる笑ひさてと要うる物を買ぬさうとうぶ子諜多は。いまぞ疱瘡
をせざるの。皮をべ故郷（家畧）にあくく。肉は今宵の宿りゆく。羹ホせんし
やとぞ。今ぞやうふく別うるとべ。ことは紙和主は饗ぶぐ。送憾ことうん
といはる渚平はうち微笑。現もうれは果報ふし。うとくべうとくふく別はんとと。
諜多は東をうるく。弱沼沓掛の方へ赴は。渚平は道の程をうるぬ不破の白木（

代ごんの後ゑ猪平が子をうしなふる法本



あり内がもとの名ぐ　猪平

ゆうまとび西のそこへ別をつ。又いくとろよせう。今彼金を悪ごろ有よるると死へ生涯はもり易し。諜多行るの勅切ありく。ゑとそよ賜を。ゆころよけて得ごろし。ぞや。と人を怨めへ今さそよ。娼死る多限ゆく。棄ひとくぞやとろふ。悪心頻よ萌しつ。背後を佶とんくまとび。まど諜ぞわゆ往来の人を迹絶く。彼猟人が逆ろうん一捉乃鳥銃のを。叢の中よあり。ことと究竟の物ゆうりとを。搔とりうんをとび火縄も滅を。両九を固ち。且く繋そく撞と蔑せば。窠錯ぞ諜多が。背を諜多へ。一声若と叫びとあくを。仰さゆ倒をとく。鳥銃亭哩と投棄ねがどくよ走ろ者つ。撃件の金紙引ゆ。莞介と笑ろく。ちし戴き。

人ゆやと来ると茅藜紀間道乃ゆ絶くゆろけ。さる程ふ猟夫復ゆる程よ酒の醉まをく上りくくぐく。くろる田の畔よ倒をつ。半晌ゆまり熟睡しく。絶く善悪をゆろざりける。時よ駿の荘客们連枷長柄の鎌ゑを引提く。動揺こと索来つ。人殺しゆをふゆ。罵て矢庭よ索紙被しゆ。復市ゆこをよ縛ゑ。ぞりの罪もゆし。徘の紐式よくをゆろ。この索紙釋ぞやと咽ゆり絞ゑくく叫ぶぞ。荘客们冷笑ひゆぞ。罪ゆろんこの南ゆる芝生まで。縛よ殺さをゆる旅客ゆり。傷よ猟乃兎ゆ走りつ。舊里を投くゆりしを。ゆる市ゆ旅客ゆよ賓乃ゆ。ゆくゆ加ゆ人も走りゆぞ。六七町西乃

あり内がもとの名ぐ　諜み

打や拷をやと。ぞりの罪もゆし。徘の紐式よくをゆろ。この索紙釋ぞやと咽ゆり絞ゑくく叫ぶぞ。荘客们冷笑ひゆぞ。罪ゆろんこの南ゆる芝生まで。縛よ殺さをゆる旅客ゆり。傷よ猟乃兎

あり。其外より又十反あまり。西のうくそる叢中より。加々爲山の復市と漆かく字
そる。名る流を捨てくあり。彼旅客ゑ撃ものとる女、紙ゑるゑ。名る流癖ゑ疑ひる〜
こゝをとらゑよりて初より人を
殺せ〜癖者を。汝ゑとゑみる
知とり。犯人を走〜そゑ。俺们
も強難脱をとゑ。扨ゑいゑせを。
引立ゑと異口同音ゑ罵そ。
村長許ねくゑ紀ぬちゑを
ども復市ゑ紀ひげゑ紀と
ゑをゑ。今ゑゑ夢の心扨〜そ。つぐと安まどる。ゑ曩ゑゑ。ゑ旅客ゑ寛ゑを。
株花と和睦〜そ。獲の鬼紙賣〜と紀いそ。醉〜をゑその処へ名る流を送をつ。

宿呼へゑ紀ゑとそ〜そ。道路ゑ臥そる。遊莫ゑとそ〜そ罪ゑ紀ゑ。ゑでふをそる
ゑとあゑんと。ゑ顧ゑ乗紙徼〜。村長許ゑ紀そ。事の証紙演ゑとゑ。名る流
ゑ字〜ゑる。その後ゑ紀ゑ
そのそ。赦さるゑうもあゑを。
村長ゑ株花をとゑ〜そ。
猟の頭ゑ紙ゑ。某ゑその
処より。復市ゑ引別をとゑ猟
〜そゑ。後のそのゑあゑをと
ゑ。ゑをゑゑ不審ゑをゑ。次の日
村長ゑ國主へ坂ヤさんとそ。復市を引〜。株花をゑ。稲荷ゑ祈ゑと。ゑゑ
〜ゑ。復市ゑ女房間柴ゑ。今茲僅ゑ五ゑる。一子岐太郎ゑ紙引そ。天を叫び

このごんへ後に緒平ノ
ひとゝ
とゝもどこそ
岐義ノ妻ノ
なる弦本

地に叫び加々潟より走り来る。群立人をうち死しく。今牽き出す良人の素っ
裸の引ぱり出すと云へば。岐太郎を又よくと位。拳さるゝごとく御らまあひ。
再くこゝろさあるふる。御免こそ。やあ人といふ言はまづ。ごまかしたれど。
背へ引ぞまとさを。親の縲紲を勸解る子の。あらぬ良さいのわ悲し
くく。父はさらん母親は。張や裂ん胸苦しさる。彼はいとゞ満潮乃。何時紙
知死期とおもひ。敷紙のくゞく堪ゆく。親子三人がひろ共る声ゆり立く
泣よけり。且く女房間柴は。ぎりやくに貝紙押拭ひ。世ちうるとゞ殺生を。
うるとはさを。怒に耽り。利に誘をく人を殺を夫はあらざるに。
うどくかう阿容こと。刃のあり紙ば立あるぐ。暗紙獄舎へ牽出あふ。
きのふん刃にうのありく。捕きあふと泣のえーより。いとゞ涙に血暈に。
堪ぞあるとど大往生の使に豫くたくいの。あひ苦しる神女湯もあふ

じうとくぬ某渦尻も居くで立んあつ。紙紙なる紙物思ひ時乃通霄泣
あひ。暁くこゝ外の足音とあるさをてく泣ゆりあひーらと立出くるをば生憎に。
心にかゝる鶏鳴紙知りる紙僧こつ。彩にひるゝ今こゞ。親子夫婦乃辞別
三人面紙あひてを。敷紙いとゞまを境暴ゝる紙為も面り。ひとくはいゆら
ぞや。とう紙口境をくく復市を禁んとをどこゝり嘆る涙に面紙ゝ背け。
間柴にさのこいくゝる泣を。犯ち科に一点るけをど。酔く遣をーも流へこを
禍の種子泣。治業とこいくこの年来数限りなる紙殺生の報ゆやあくんぞこん
今茲にあつと四十二の尼員とこをそゝふるをとくく人を殺さねばこを又
命こゝをんや。まゞーゞ程ぞ岐太郎も。大人ーう留ゝをよ。といふ間も時や
移らんとくく。引こゝくる縛の索にあつて恩愛の伴苦ゝ紙生別を。喃情に
今要時。いとあり。と留あゝぞ。地上に礎と轉輾跡異ぶ妻と子紙共をんくる

越前

美濃舊衣八丈綺談巻之一 終

美濃舊衣八丈綺談巻之一

裏人の各欲を懦りけりさる程に稲葉山城の長が許ふるりく。牧村
衛門長晴まづ駕を上らる旅客の亡骸を展検みるに芦月一角が舊奴隷
諜吹と分る。渠はその主と後れく。此玄下德なる。舊里へ帰るべきと
懐中の守り賜へる金影必定あるべしとするに。その金を死人に誘しもて
復市様荒歩紙鞠問せるに。彼多話のる。定りてよりく両個の猶夫は
そぐまく獄舎に繋りて程小復市は暴に病つづらひつ。只三日ばかり
けり。一人既に病死せりぬ。再度の糺明に及ばざるに。様義はゆるさるて加を洩
へりしとぞ。

美濃舊衣八丈綺談巻之一終